空觀の記號論理學的解明

中村元

一

論理學は普遍的な學問であるべきはずのものであるが、現實に成立した論理學體系は、何らかの意味で當該論理學者を生み出した歷史的社會的基盤に制約されてゐるのが歷史的事實である。「因明」すなはち佛教論理學も恐らく佛教の根本眞理乃至根本的立場から何らかの影響、制約を受けてゐるのではなからうかと考へられる。

　ところでこの問題を解決するための場としてこゝでは現代の記號論理學を用ひたい。從來のインド論理學の研究は、「アリストテレース論理學」と呼ばれるところの、アリストテレースに由來し中世の論理學者によつて完成された傳統的な形式論理學の立場からなされてゐる。しかしこの論理學はヨーロッパ諸言語にもとづいて成立したものであるから、ヨーロッパ諸言語の制約を受けてゐる點が多い。だからそれは一つの論理學の潮流として、比較研究のための一つの材料を提供してくれるといふ意味はあるが、それを基準とすることは、現在ではもはや不適當である。その基準は近代の論理學、すなはち記號論理學或ひは數學的論理學、精密論理學と呼ばれるもののうちに求められねばならない。

　かゝる研究の必要であることは、すでにポーランドのシャイエル(St. Schayer)[1]によつて唱導され、現在ではアメリカ・ハーヴァード大學のインゴールズ（Daniel H. H. Ingalls）教授が新ニヤーヤ派[2]について、注目すべき成果を擧げてゐる。筆者は記號論理學を一種のリトマス試驗紙として佛教論理學に適用してみようと思ふ。すなはち、佛教の論理思想を能ふ限り記號論理學の數式を適用して表現してみようとするのである。さうすると、現代の論理學者が常識的に理解してゐるものとの間に重大なずれや喰ひ違ひを發見することができる。それを手がかりにして佛教の論理思想の特徵を明らかにし、そこに佛教的思惟としての空觀の影響を認めたいと思ふ。

　もちろん記號論理學は西洋的思惟の基盤から現れ出たものである。インドにも記號的思惟は存在したが、可變的部分（variable）としての記號による思惟はつひに現れなかつたやうである。（この點は他の機會[3]に論じておいたから、こゝでは省略する。）だから、いまわれわれのめざす考究においても西洋的思惟の所產を以て東洋の思惟をわり切るといふことになるのは免れないが、しかし現在としては記號論理學がいつそうすぐれた、より進歩した論理學であり、既存諸言語の制約を離れてゐて、そのためにまたインド思想乃至インド論理學の解明のためにより好都合であるといふならば、やはりこれにたよるべきであらう。

　從來のインド論理學研究者が西洋の傳統的論理學の立場に立つて

研究してゐたために、インド論理學の體系ははなはだ不齊合であると考へられてゐたが、近代の論理學の立場から吟味すると、それは少しも不齊合なのではなくて、却つて西洋の傳統的論理學が無用な規則を固執してゐたことの判明する場合が少くない。いまその實例を若干指摘してみよう。

　アリストテレースに由來する傳統的論理學においては、概念そのものは常に主格（nominative）で表示されねばならなかつた。(4) インドの論式においても、同樣に主格を以て表示されることが非常に多い。例へば、煙を見て火の存在を知る場合の論式においては、(6)

『かの山は火を有するものなり。』(parvato 'yaṃ vahnimān)

といふ。しかしながらこの論式(6)において主張命題はしばしば

『こゝに火あり』(agnir atra)

といふ文章で表現される。普通のサンスクリット文法書によると、「火」が主語であり、「こゝにあり」が述語であると說明される。ところがインドの論理學者たちによると、「こゝに」(atra) が主張命題の主語 (pakṣa) なのである。西洋の傳統的論理學の體系に慣れてゐる人々の眼には、インドのかゝる表現形式ははなはだ錯雜してゐるやうに見える。(つまり西洋の傳統的論理學によると、前者は包攝判斷であり、後者は存在判斷である。)

　しかし近代論理學の立場から見ると、それは少しも奇異ではない。ブール (Boole) 及びシュレーダー (Schröder) の論理代數學の立場では、煙をa、火をbとすると、

$-a+b=1$　または　$a \lhd b$ (7)

で表示される。(前者の式の表示する意味は「あらゆるものはaならざるものかまたはbである」といふことである。) 或ひは他の式を用ひると

$a-b=0$（aであつてbでないものは有り得ない）(8)

$ab=a$（aにしてbであるところのものはaである）

と表示される。しからばこゝでは主格を用ひなければならぬといふ傳統的論理學の問題は解消してしまふのである。

　またインドの論理學は全稱肯定判斷を主として扱ひ、全稱否定判斷は全稱肯定判斷に書き換へてしまふことが多い (e. g. anityaḥ śabdaḥ)。また特稱判斷といふものに特別の位置を與へてゐない。これはインド論理學が不精密であるかのごとき印象を與へてゐたが、しかし必らずしもさうは言へないのであつて、この四種の區別そのものも現代の論理學においては解消してしまつた。もちろんかゝる判斷の種別を論理代數學において表現することは可能である。

A　All a is b:　$a \subset b;\ ab=a;\ a-b=0.$

E　No a is b:　$a \subset -a;\ a-b=a;\ ab=0.$

I　Some a is b:　$a-b \neq a;\ ab \neq 0.$

O　Some a is not b:　$ab \neq a;\ a-b \neq 0.$

しかしかゝる四種の區別は、表示のより多樣な可能性のうちに含まれて、特別に重要な意義を主張し得ない。(9) また論理代數學では實在しないもの（0で表示される）を主語とする全稱判斷は眞であるが、特稱判斷(10)は invalid であるとして、この場合の直接推理を否認してゐる。もつとも論理計算では眞僞の問題を除外するから直接推理は成立する。

$$(x).\varphi x. \subset (\exists x).\varphi x$$

すなはち $\varphi a.\varphi b.\varphi c.\ldots\ldots;\ \subset \varphi a \vee \varphi b \vee \varphi c \ldots\ldots$ (11) しかし直接推理といふ名稱は與へられてゐない。〔さうして論理代數學では特稱判斷を

含む推論を表現するのに、特稱といふ特別のカテゴリーを立てない。例へば

　E I O　$ab=0.$　$bc\neq 0.$　$a-c\neq 0.$[12]

また特稱判斷に關連して言はれ得ることであるが、主としてシナ・日本では特稱判斷は存在判斷の形式を以て表現されることが多かつた。例へば、

　有人曰、……

　花見に行く人もある。

ところが論理計算によると、xを「人」、φを「花見に行く」にあてると、

$$(\exists x).\varphi x.\equiv.\sim(x).\sim\varphi x$$ [13]

で示される。この意味内容は言語表現の上では特稱判斷としても存在判斷としても表現し得る。しからばこの點ではシナ人・日本人の言語表現が非論理的であるといふ非難は當らないことになる。

次に間接推理について見るに、これはシャイエル[14]の指摘したことであるが、インド論理學における結論、すなはち主張命題には二つの表現法がある。一つは「煙を有するものは火を有するものである」(yo yo dhūmavān, so'gnimān) であり、他は「煙のあるところには火がある」(yatra yatra dhūmas, tatra tatrāgniḥ) である。ところでアリストテレースから發して西洋中世に完成された傳統的論理學においては、前者のみが扱はれてゐた。後者は前者のやうな全稱肯定判斷（A）に書き換へられるか、さもなくば假言判斷のかたちに書き換へられねばならなかつた。ところが記號論理學の立場に立つと、後者の表現形式が原型を保存しつゝ解明され得る。すなはち後者の實例全體が次のやうに説明される。

(1) 主張（宗*）$\psi\alpha$　α（この山）に火あり

(2) 理由（因*）$\varphi\alpha$　α（この山）に煙あり

(3) 周延關係（vyāpti）の確定（喩）

　$(x).\varphi x.\supset\psi x.$　どこでも任意の場所xに次の法則が適合、する。——xに煙があるときにはxに火もまた存在する。

(4) 適用（合*。pakṣadharmatā の確定）

　$\varphi\alpha.\supset\psi\alpha.$　その規則は$x=\alpha$（pakṣa）に關しても適合する。

(5) 結論（結*。sādhya の確認）

　規則は$x=\alpha$ にも適合するし、$\varphi\alpha$ といふ陳述が眞であるから、それ故に$\psi\alpha$ といふ陳述もまた眞である。

從來インド論理學の研究は西洋の傳統的論理學を基準として行はれた。したがつて五分作法が五つの支分を有するのは冗長であり、實際は三つだけでよいと考へられてゐた。しかし記號論理學を使つて解明すると、五つの支分にそれぞれ場所が與へられるのであり、決して冗長なものではないといふことが理解され得る。

　ところで上に擧げた論式を一つの條件文に要約すると、

$$(x).\varphi x\supset\psi x:\varphi\alpha.\supset\psi\alpha.$$

といふ式で表現される（ラッセルのいふ theory of apparent variables）。可變的部分（variable）であるxのすべての値に對し、φといふ陳述作用がψといふ陳述作用を含めて意味してゐるとすると、$\varphi\alpha$ といふ陳述は $\psi\alpha$ といふ陳述を含んでゐる。インドの前掲の例についていへば

φ＝……の上に煙あり、ψ＝……の上に火あり、α＝この山だから、私見によれば、前掲の詳しい五分作法の論式を一つの條件文のかたちに要約されたものが、いまこゝに示されてゐるものであり、それがディグナーガの論理學改革と呼ばれるものにほかならない。ディグナーガ以後の佛教論理學の論式は、西洋の形式論理學のやうに三つの文章よりなるのではなくて、三支作法全體が一つの文章で表現されてゐることが多い。

シャイエルがすでに指摘してゐることであるが、アリストテレースの推論は二つの包攝關係の間の implication である。（すなはち一方では SaM. MaP と他方では SaP である。）ところが、インドの推理は二つの陳述の間の implication より成る（すなはち一方では $\varphi x \supset \psi x$、他方では $\psi\alpha$ である。）。

アリストテレースの推理　SaM. MaP.$\supset$ SaP.(15)

インドの論理　$(x).\varphi x \supset \psi x : \varphi\alpha : \supset \psi\alpha$.

1 St. Schayer: Über die Methode der Nyāya-Forschung (Festschrift Moritz Winternitz, Leipzig 1933. S. 247—257.) なほ同教授の Anfänge der Aussagenlogik in Indien (Bulletin de l'Académie Polonaise des Sciences et des Lettres, Cracovie, 1933) はまだ披見の機會を得ない。

2 Daniel Henry Holmes Ingalls: Materials for the Study of Navya-Nyāya Logic. Harvard Oriental Series, vol. 40. Cambridge, Mass., 1951. なほ同氏はシャンカラの無明の觀念のうちに多値論理學的思惟の萠芽を認めてゐる（Śaṁkara on the Question: Whose is avidyā ?—Philosophy East and West, vol. III, no. 1, 1953, pp. 69 f.）。もしその議論を採用するならば、佛教の無明にも同様の意義を認めることができるはずである。

3 拙稿「思惟と表現形式」（筑摩書房「哲學講座」第一卷一六八頁以下）。なほインドの論理學は數學と結びつかず、むしろ文法學と結びついて發展した。（Ingalls: The Comparison of Indian and Western Philosophy. The Journal of Oriental Research Madras, XXII, 1954, p. 1 f.）

4 Carl Prantl: Geschichte der Logik im Abendlande, Bd. I, S. 302.（須藤新吉先生の御教示による。）

5 e. g. Tarkabhāṣā, s. v. avayavāḥ. cf. Tarkasaṃgraha, Anumānaparicchedа.

6 『因明入正理論』梵文（宇井博士『佛教論理學』三七四頁）。agnir atra, dhūmāt (Nyāyabindu II, 18)

7 C. I. Lewis and C. H. Langjord: Symbolic Logic, p. 34.

8 ib. p. 67.

9 ib. p. 51. cf. p. 58.

10 ib. pp. 62—54.

11 ib. p. 94.

12 ib. p. 61. cf. p. 101.

13 ib. p. 93.

14 Schayer: op. cit.

15 從來の傳統的論理學における全稱肯定判斷（A）は、記號論理學の立場からは、二つの概念の間に成立する可能的な種々の關係のうちの一つにすぎないといふ點で、小文字の a を以て表示することが、一部の論理學者によつて行はれてゐる。末木氏

の教示によると、Bocheński: Ancient Formal Logic. North Holland 1953. にも使はれてゐるとのことである。しかし現在多くの學者はこれを用ひないやうである。

二

ところで近代乃至現代の論理學を空觀の解明に適用すると、どういふことになるであらうか。

〔一〕インドの哲學書には、關係代名詞をいくつも用ひた複文より成る陳述が非常に多い。それらは西洋の傳統的論理學の表現形式に書きかへることは極めて困難であるか、或ひはサンスクリット文の表現に無理を加へなければならない。ところが記號論理學ではそれが割合に樂にできるのである。

例へば、龍樹の主張

『甲に依存して乙があるとき、甲が乙と別異なるものであるといふことは有り得ない。』(『中論』四ノ五)

Yat pratītya ca yat, tasmād anyan nopapadyate.

といふ命題は

$(x,\ y).xRy.\supset\sim(x\neq y).$

（xとyとが關係があるとき、xとyとが同一でないといふのは誤りである）

と表示し得る。(1)

これはシャイエルの指摘したところであるが、しかし『中論』全體としては相互に關係ある二つのものが不一不異であるといふことを主張してゐるのであるから、『中論』の基本的立場すなはち緣起說は次のやうに表示することができる。

$(x,\ y).xRy.\supset.\sim(x\neq y).\sim(x=y).$

これは嘉祥大師吉藏のいふ一異門破を論理學的に表現したわけである。

〔二〕さて中觀派における空の論證を見るに、個々の場合の議論には、形式論理學乃至記號論理學の原則を充分に守つてゐる。

(1)例へば「ニルヴァーナが非有且つ有ではありえない」といふことを論證して、

『ニルヴァーナのうちにどうして非有と有との兩者があらうか。この兩者が同一のところに存し得ないことは、あたかも明と暗とのごとくである』(『中論』二五・一四)

といふ。これをチャンドラキールティは解釋していふ、

『有と無とはともに互ひに矛盾してゐるから、ニルヴァーナといふ一つのもののうちに兩者がともに存在することはあり得ない。』(2)

ここでは形式論理學にいふ矛盾律を適用してゐるのである。ところでブールによると、「何ものもxと非xではあり得ない」といふことは

$x(1-x)=x-x^2=x-x\cdot x=0$

と示される。(3) シュレーダーによると、

$a(-a)=0=-aa.$ (4)

と示され、現代の論理學では

$\sim(p.\sim p)$

と示される。(5) さうしてシュレーダーの論理代數學によると、aがaであつてしかも無であるならば、aは無である。

$a\times0=0$ (6)

また、例へば、現在去りつゝある現在といふものが有り得ないと

いふことを主張して

『すでに去つたものと未だ去らざるものとを離れて、「いま去りつゝあるもの」といふ他の第三の世路の種類をわれわれは認めない。(7)』

といふ。

この議論は排中律に従つてゐるのであるが、それはシュレーダーによると

$$a+-a=1$$ (8)

と示される。

さて主要な思考の法則をこのやうに適用して龍樹は研究を進めて行くのであるが、かれは佛教の傳統的な考へに従つて、われわれの存在を構成する幾つかの領域または要素にわれわれの存在を分析して、その一つ一つについて空なる所以を論證してゐる。例へばかれはわれわれの存在を構成する六つの機官（六根）とそれに對應する六つの對象領域（六境）について、先づ視覺機官が空であると論證して他の諸機官及び諸の對象領域も同様であると主張する。(9) また五つのあつまり（五蘊）についても、その一つである物質的なかたち（色）を論じて、その論理を他の四つに適用する。(10) それによつて空觀の立場における無我説が成立することになる。ところでこの論理は、シュレーダーの論理代數學によるならば、

「もしも $a=0,\ b=0,\ldots\ldots$ であるならば、$a+b+\ldots\ldots=0$」(11)

のかたちで示され得る。

〔三〕また従來西洋の傳統的論理學の立場から見るならば、龍樹の立論が明らかに形式論理學的な誤謬を犯してゐるにもかゝはらず、二値論的なシュレーダーの論理代數學の立場から見ると誤謬にはならず、正しい立論である場合がある。例へば龍樹はいふ、

『もしも何か不空といふものがあるならば、何か空といふものがあるであらう。

しかるに不空といふものは何も存在しない。どこに空といふものがあるであらうか。(12)』（『中論』一三・七）

この頌の前半は假言判斷である。だからこの命題から導き出し得ることは、「何か空といふものがあるであらう」といふ後件の否定から「もしも何か不空といふものがあるならば」といふ前件の否定を導き出して來ることである。しかるに龍樹は前件の不定から後件の否定を導き出してゐる。これは換質換位の法則を誤つてゐる。しかし論理代數學の立場から考へると、いま空をかりに a で示すと、空と不空は相互に exclusive であるから、右の立論は

$$-a+a=1$$

で示される。これを書きかへると $a+-a=1$ であつて形式的には排中律の式に相當する。それをさらに書きかへると

$$-(-a)+-a=1$$

となる。この a に「空」といふ概念をあてはめて言語で表現すると、

「不空といふものはないし、空といふものもない。（さうしてそれ以外の選言肢は成立し得ない、といふ）のが眞理である」

といふことになる。しからばこの場合、アリストテレース以來の論理學の立場から見て誤謬とされるものが、論理代數學を適用すると何故に誤謬とされないのか。それはシュレーダーの論理代數學が眞僞の實質内容をともなつた二値論的立場をとつてゐるからである。

龍樹の他の立論も同様に解釋することができる。例へば、

『もしも未だ生じない何ものかがどこかに存在するならば、そのものは生ずるであらう。

しかしそのものは存在しないから、何が生ずるであらうか。』

(『中論』七・一七)

これも換質換位の法則を誤つてゐる。しかし論理代數學により、「もの」をa、「生ずる」をbで示すと、$ab=1$ ∴ $-(ab)=-1$ となる。こゝへ $a=-1$ を導入すると、

$$-(-1\cdot b)=1$$

$$\therefore\ 1\cdot -b=1$$

すなはち「生ずる」(b)といふことは否定されねばならない。

〔四〕しかしながら佛教、特に中觀派では、現代の論理學の立場からはそのまゝ了解し難いやうな議論も述べられてゐる。『中論』ではしばしば佛教に傳統的な「單々倶非」の四句分別を用ひてあらゆるものの空なることを論證してゐる。もしも第一句(單)と第二句(單)とが矛盾關係にあるのではなくて多少外延的に重なり合つてよいといふのであるならば、Venn diagram が適用される。さうしてそれは論理代數學によれば、

$$ab+a-b+-ab+-a-b=1$$

と示される。[13] ところが『中論』に出て來る第一句と第二句とは互ひに矛盾關係にある。例へば「如來は常でもなく、無常でもなく、常かつ無常でもなく、非常かつ非無常でもない。有限でもなく、無限でもなく、有限かつ無限でもなく、有限にも非ず無限にも非ずといふのでもない」などと說く。[14] この議論は非常に多く用ひられてゐる。この場合、第一句(常、有限など)と第二句(無常、無限など)は外延的に重なり合ふことなく、矛盾してゐる。しからば、四句は a, $-a$, $a(-a)$, $-a-(-a)$ で示されることになる。そこでこの四句を合して extricate すると、

$$a+-a+a(-a)+-a-(-a)$$

$$=a+-a+0+-aa=a+-a+0+0$$

$$=a+-a=1$$

となる。つまり四句のうちの第三句、第四句は實質的內容的には意味をもたぬのである。この點で四句分別の論理——それはもう原始佛教時代に現れたものであるが——は實質的には無意味なものを立てゝゐる。のみならず最後に出て來る $a+-a=1$ といふ結論は、空觀の認め得ないものである。空觀によれば、aも$-a$もともに空であり、空の原語 śūnya は數學ではゼロを意味するから

$$a+-a+a(-a)+-a-(-a)=\cdots\cdots$$

$$=0+0+0+0=0$$

と表示され得る。ところでこれはまさに中觀派の意圖するところであつた。

『眞理は有に非ず、無に非ず、有且つ無に非ず、また兩者より成らざるにも非ず、と中觀派は知る。』[15]

中觀派においては、事物が絕對的に有であると說くこともできず、また絕對的に無であると解することもできないといつて非有非無の中道を說くのが緣起と同趣意であると考へられてゐるが、この點をサーンキヤ學派は論難する。『金七十論』はいふ、

『われ先づ釋迦の執を破し、後に衞世師(=ヴァイシェーシカ)を破さん。釋迦の所說の非有非無、この義は然らず(=正しからず)。(何となれば、有と無とは)自ら相違(=矛盾)するが故に。もし非有ならば、すなはち無を成ず。もし非無ならば、すなはちこ

れ有なり。この有無なるもの一處にあるは、相違の故に、立つることを得ず。譬へば「この人は（同時に）死しまた活く。」と説くことあるがごとし。この言、相違すれば、成就せず。釋迦の言もまたかくのごとし。』

これに對して眞諦三藏は反駁する。

『三藏曰く、この計は然らず。何を以ての故に。（何となれば）釋迦にはこの執無きが故に。もし釋迦は非有と説くも、無を執せず。（もし）非無と説くも、有を執せず。（釋迦の説は）有無の執を、離れたるが故に、（サーンキヤの論難は）破を成ぜず。[16]』

サーンキヤ學派が矛盾律乃至排中律の原則を固執するのに對して、佛教はそれとは異った思惟を容認してゐるのである。

最後に問題が殘るのであるが、たとひ空の原語 śūnya がゼロを意味したとしても、論理代數學の0と同一視してよいかどうかということである。現代の論理計算においては眞僞の價値判斷をいちおう除外視してゐるが、しかし論理代數學では、二値論の立場に立つが故に、無（nothing）は0で示され、存在しないものはすべて0で示されるとともに、"null class"[17] とよばれ、それは有り得ないこと、虚僞をも表示する。これに對して1は眞を意味する。したがつてその限りにおいては、0を以て空を表示することはやはり許されねばならない。たゞ空觀には記號論理學の思惟と矛盾する側面、或ひはそれを以ては盡し得ない側面がある。それは多値論理學的に取り上げられるべきものであるか、或ひは辨證法として解決さるべきであるか、大きな問題である。これを開明することが今後の課題として殘されねばならない。

1 Schayer: op. cit.

2 bhāvābhāvayor api parasparaviruddhayor ekatra nirvāṇe nāsti saṃbhava iti. (Mvr., p. 532, l. 9)
この論理はまたシャンカラがヂャイナ教の七句表示法を論難する場合にも用ひられてゐる。na hy ekasmin dharmiṇi yugapat sad-asattvādiviruddhadharma-samāveśaḥ sambhavati śītoṣṇavat (ad Brahma-sūtra II, 2, 33, ĀnSS. vol. I, p. 594, l. 4.).

3 Lewis and Langford: op. cit. p. 11.

4 op. cit.: p. 30. cf. p. 33.

5 op. cit.: p. 35.

6 op. cit.: p. 29.

7 na ca gatāgatavyatirekeṇa tṛtīyam aparam adhvajātaṃ paśyāmo gamyamānaṃ nāma. (Mvr., p.93, l. 7)

8 Lewis and Langford: op. cit. p. 34.

9 『中論』第三章。

10 『中論』第四章。

11 Lewis and Langford: op. cit. p. 39.

12 プラサンナパダーにより、śūnyam=śūnyatā, aśūnyam=aśūnyatā と解す。

13 Lewis and Langford: op. cit. p. 53, cf. p. 42.

14 中論 XXII, vv. 12. cf. 11. cf. XXV, 4—18; 22; 23.

15 na san nāsan na sadasan na cāpy anubhayātmakam/ catuṣkoṭivinirmuktaṃ tattvaṃ Mādhyamikā viduḥ// Bodhicaryāvatārapañjikā, p. 359, ll. 10—11.

atas tattvaṃ sadasadubhayānubhayātmaka-catuṣkoṭivinirmuktaṃ śūnyaṃ eva. SDS. II, *l.* 159. cf. *l.* 160 f.

『若菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時、於一切法、若取有、若取非有、若取亦有亦非有、若取非有非非有、若取不取、非行般若波羅蜜多。』（『大般若經』第四一巻、大正、五巻二二九頁中）

etayā catuṣkoṭikayā Mahāmate rahitāḥ sarvadharmā ity ucyante. (Laṅkāvatāra, ed. by Nanjio, p. 122, *ll.* 2—8)

『分三別推二求諸法一、有亦無、無亦無、有無亦無、非有非無亦無、是名二諸法實相一、亦名二如法性實際涅槃一。』（『中論青目釋』大正、三〇巻三六頁中）

sad asat sad asac ceti yasya pakṣo na vidyate/
upālambhaś cireṇāpi tasya vaktuṃ na śakyate//
——Mvr. p. 16 漢譯『廣百論本』第八品第二五偈。

16　『金七十論』第九頌の序文長行。

17　Lewis and Langford: op. cit. p. 23.

附記　この論文は文部省科學研究費による宮本正尊・川田熊太郎兩博士の綜合研究「佛教における根本眞理とその諸形態」のうち筆者の擔當した部分の報告である。一つの試論にすぎないが、記號論理學の問題については、末綱恕一博士、鶴見俊輔、ゴーヒーン兩教授より示唆教示を受けた點多く、專門的な問題については末木剛博氏の懇切な示教にあづかつた。こゝに記して深い感謝の意を表する。

——最近フランスにおけるインド・佛教研究の動向　1——

戰後 C. J. Przyluski・A. Foucher・R. Grousset・J. Block などの諸大家が相次いで沒し、やや落莫の感を免れないけれども、堅實な東洋學の傳統はなおなかなか根強い。その中心はパリで、六つの研究機關がある。

1　**フランス大學**　現在 J. Filliozat 教授が管掌しており、教授にはインド醫學に關するに四冊の著書のほか、六十餘のインド學關係の論文がある。また P. Mus 教授の下ではインドシナ研究が行われている。

2　**東洋現代語學校**はサンクリット以外のインドの諸言語が考究されており、タミル語學者たる P. Meile 教授がその主任である

3　**ギメー博物館**　館長 P. Stern 氏は Anfoyer 女史と共にインド美術を研究している。

4　**ソルボンヌ大學**　サンスクリット講座擔任の L. Renou 教授の活躍は、ロンドン大學・エール大學・デカン大學・日佛會館など全世界に跨り、三十一冊の著書、九十餘の論文をもつて、名實共にフランスのインド學の指導者である。目下『サンスクリット詩史』を執筆中と云われる。同大學佛教研究の主任である P. Demiéville 教授は、已に『那先比丘經』『大乘起信論』など漢譯佛典に關する論文を發表、シナの言語文學を教授している。なおソルボンヌには「比較哲學」の創唱者として有名な P. Masson-Oursel 教授、東南アジアの佛教様式研究家の P. Dupont 氏などのほか、シナ學研究所の Jacques Gernet 氏も佛教に造詣が深い。

——（二五九頁へ續く）